

ワークショップにおける内発的動機づけプログラムに関する研究

ー福祉施設職員に対するワークショップでの試行と検証ー

水上聡子 — * 1 栗原知子 — * 2
桜井康宏 — * 3

キーワード:
市民主体, 内発的動機づけ, ワークショップ方法論,
シティズンシップ教育, ファシリテーション

Keywords:
Citizen Independence, Intrinsic motivation, Workshop methodology,
Citizenship education, Facilitation

A STUDY ON THE INTRINSIC MOTIVATION PROGRAM IN THE WORKSHOP

ー Trial and verification on the workshop for the welfare service worker ー

Satoko MIZUKAMI — * 1 Tomoko AWAHARA — * 2
Yasuhiro SAKURAI — * 3

For the increase of the civil consciousness and the ability to act as a citizen, it is important to develop the people's independence by an intrinsic motivation, where it is essential that each person satisfies three psychological desires of ability, autonomy, and relation. The workshop adopting the trial program developed those desires and resulted in the increase of motivation and the change of willingness and action. Verifying the methodology of the workshop has shown an effective way to enhance citizens' intrinsicness.

1. 研究の目的と方法

シティズンシップ教育¹⁾では、知識・スキルを活用してシティズンシップを発揮する際の原動力として意識が重要とされ²⁾、実際のまちづくりやワークショップ(以下「WS」)において「内発性の育み」の重要性³⁾を痛感する。本研究の目的は、以下の仮説に従い、内発的動機づけを主眼に実施したWSの意義を検証することである。

1) 仮説1: 内発的動機づけは、「したいからする」という活動それ自体が目的で、報酬等外発的な要因に左右されない動機づけであり、デシとライアンによる「有能性・自律性・関係性の3つの心理的欲求は、成長に向けての生得的な傾向性で、同時に満たされることで人は意欲的になる」という考えに依拠し^{4), 5)}、WSで欲求充足が進み、内発的動機づけが芽生え、主体的行動変化が生まれると考える。

2) 仮説2: 内発的動機づけは様々な場面で発生し得るが、WSという場で意図的に行うことで、「内発性の育み」がより促進されると考え、本研究では、「学びの形態(3つの対話: 自分、周り、講師との対話)」と「学びの営み(6つの行為: 共存・内省・物語・傾聴・分かち合い・承認)」を展開しながら⁶⁾⁻¹⁰⁾、表1に示す多段階的な「学びの段階(9つの段階)」を丁寧に上って行くことが重要と考える¹¹⁾。

研究の手続きと分析方法等については以下のとおりである。

- WS参加者(以下、対象者)は、福井県内のA社会福祉法人とB医療法人の職員57名であり、2009年6月3日、7月28、30日の3日に分けて、組織市民力¹²⁾の向上、主体性の成長を目標に実施した¹³⁾。
- 本論文の分析項目となる「心理特性」「欲求要素」「プログラム評価」は、表2に示すように数回に分けて対象者から入手した。
- 「心理特性」は、表3に示す内面性と社会性の各10項目について「自己評価(5段階評価)」された結果を点数化して分析した^{14), 15)}。
- 「欲求要素」は、「意識」に注目する立場から、表4に示す52項目の「美徳」^{14), 15)}から選択(「得意」「苦手」や「発揮」)された結

果を有能性・自律性・関係性に分類し、意識・行動変化を分析した。

5) 「プログラム評価」は、ふりかえりシートと研修報告書の記述から、意識・行動変化と「学びの形態・営み・階段」を読み取った。

表1 内発的動機づけのための「学びの段階」

段階	内容	意義
1 会場設営 (友好関係の構築)	輪になり、全員 の顔が見えるよ うに座る。	気持ちの一体化、連帯感、対等な協力関係、和の意識、友好感 覚等を育む。→関係性
2 参加のルール (安全安心な場づくり)	皆で尊重する 境界線を説明 し、合意を得 る。	安全安心のために信頼(Trust)を構築する。 ①気転Tact: お互いに思いやる。→関係性 ②尊敬Respect: 自他ともに尊敬する。→有能性、関係性 ③理解Understanding: お互いに理解しあう。→関係性 ④自明心Self-control: 時間やプライバシーを守る。→自律性 ⑤真実Truthfulness: ありのままの、正直に語る。→自律性
3 アイスブレイク (緊張の緩和) (自分らしさの気づき)	自己紹介を兼ね て仕事の中 の無邪気な色 で表わし、発表 する。	緊張をほぐし、やすらぎ、喜びの感覚をもつ。→自律性 自分らしく存在することの素晴らしさを実感する。→自律性 自分のことを話すことで勇気や自己主張の力を育む。→自律性 他者の発表を聞いて、共感する力を育む第一歩。→関係性
4 カードピック (ワーク1~3への ウォーミングアップ)	52枚のカードから 一枚を引き、 仕事の体験と 重ねて考え、全 体で分かち合う。	52の美徳の言葉それぞれに広く深い意味があることを自分の引い たカードや他者の発表から理解する。 1枚のカードの言葉に身近な体験をあてはめ物語を考えることで、 自己への理解を深め、話すことで互いの理解につながる。ナラティ ブアプローチの第一歩。→有能性、自律性、関係性
5 ペアづくり (エナジーゼー)	半割は1人ペアで 相手を探す。	メインワークの前に、さらに緊張をほぐし元気づける。→自律性 人と人の出会いに感謝、喜びを見出す。→関係性、自律性
6 ワーク1 (美徳の気づき)	得意・苦手な美 徳をシートに記 入し、ペアで話 した後、全体で 分かち合う。	得意な美徳、苦手な美徳を考えることで、物語を生み出し、自己 への理解、他者への共感を育む。→有能性、関係性 自分のことを話すことで勇気や自己主張の力を育む。→自律性 自らの資質に気づくとともに、相手から承認されることで、自信を育 み、互いに有能感を高めあう。→有能性、関係性
7 ワーク2 (美徳で成長)	苦労を乗り越え た体験を美徳 を使って考え、 ペアで話し、全 体で分かち合う。	苦労を乗り越えた体験を美徳を使って考えることで、自らの資質を さらに成長させ、自信を育む。→有能性 自分のことを話すことで勇気や自己主張の力を育む。→自律性 体験を物語とすることで、自己への理解、他者への共感を育む。 →有能性、関係性
8 ワーク3 (行動のビジョン化)	職場のビジョン を考え、全体で 分かち合う。	自分も周りもいかにと進める職場づくりのための行動ビジョンを 考えることで、目標を見出し、行動に向けて目的意識や決意を育 む。→自律性
9 ふりかえり (学びの客観化)	シートにそって 学びをふりかえ り、記入する。	自分の学び、美徳の変化などを客観的にふりかえり、整理整頓し て、学びを自分のものとする。→有能性、自律性 ともに時間を過ごした仲間への感謝の気持ちを感じる。→関係性

¹⁾ 福井大学大学院工学研究科 博士後期課程・学士(芸芸)
(〒919-8507 福井市文京3-9-1)

²⁾ 福井大学教育地域科学部 助教・修士(工学)

³⁾ 福井大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)

¹⁾ System Design Eng. Course, Graduate School of Eng., Univ. of Fukui, B. Liberal Arts

²⁾ Assistant Prof., Faculty of Education and Regional Studies, Univ. of Fukui, M. Eng.

³⁾ Prof., Architecture and Civil Eng. Course, Graduate School of Eng., Univ. of Fukui, Dr. Eng.

表2 分析項目の入手時点

	WS開始時	WS中間時	WS終了時	1ヶ月後
①心理特性	○		○	
②欲求要素		○	○	○
③プログラム評価			○	

表3 心理特性（内面性、社会性）の自己評価項目

内面性	社会性
1 自分の良いところも、苦手なところもありのままだと認めることができる。	1 すぐに人と親しくなる方だと思う。
2 自分なりの個性を大切にしていると思う。	2 他者の態度や表情を気をつけて見るようにしている。
3 常に自分の意見を持つようにしている。	3 相手の立場に立つてものを考えることにしている。
4 自分が何をしたいのか常にわがわがしている。	4 困っている人を見ると放っておけない気持ちになる。
5 自分の能力を情一杯発揮している。	5 社会の中で、自分が果たすべき役割がある。
6 自らを創造・開発していくことができる。	6 人と心が通い合った時の喜びは、言葉では言い尽くせない。
7 自分が必要とされている存在として価値を感じる。	7 人に対して、誠実であるよう心がけている。
8 自分の心に正直に生きている。	8 自分のやるべきことは責任を持ってやり遂げる。
9 将来に希望と期待を抱いている。	9 人の役に立てたり、助け合ったりすることに充足感を見出す。
10 何事に対しても積極的に取り組んでいこうと思っている。	10 仲間と力を合わせて目標に向かってがんばるのが好きだ。

①とてもあてはまる ②ややあてはまる ③どちらともいえない ④ややあてはまらない ⑤あてはまらない
※それぞれ5段階評価。点数は5・4・3・2・1で50点満点×2=100点。

表4 欲求要素と美德項目の内容^(注5)

欲求要素	美德項目
有能性	自信、優秀、信頼性、創造性、整理整頓、清潔、誠実、名譽
自律性	自己主張、自制心、節度、慎重、責任、貞潔、正義、勇気、忍耐、辛抱強さ、勤勉、決意、喜び、やすらぎ、コミットメント、理想主義、目的意識、情熱、熱誠、正直
関係性	思いやり、いたわり、親切、協力、和、手伝い、礼儀、柔軟性、奉仕、愛、忠誠心、寛大、寛容、気転、謙虚、感謝、尊敬、優しさ、信頼、共感、友好、ゆるし、誠実、理解

2. 心理特性と欲求要素の変化の概要

1) WS 開始時と終了時の心理特性結果を示したものが図1である。内面性・社会性ともに向上しているが、内面性の変化が特に大きい。なお、以下の分析では「得点タイプ（図1のⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳで示す4象限タイプ）」と「平均値」を適宜使い分けている。

2) WS 中に把握した欲求要素（得意要素と苦手要素）を示したものが図2である。得意は関係性＞自律性＞有能性の順、苦手はその逆であるが、得意要素の差が極めて大きくなっている。ただし、表5に示すように心理特性によってこの順序は変化し、タイプⅢ・Ⅳ（内面性が平均以下）では有能性を苦手とする割合が高いのに対して、タイプⅠ・Ⅱ（内面性が平均以上）では自律性や関係性を苦手とする割合の方が高くなっている。

3) 終了時に把握した「発揮要素（WS中に発揮した要素）」と「発達希望要素（さらに発達させたい要素）」を示したものが図3である。図2に比して、発揮要素として自律性の比重が高まり、発達希望要素としては自律性がトップとなって有能性の比重が高まった。この変化を検証したのが図4で、「(52項目中の) 得意と異なる美德を発揮した」86.0%、「(3要素中の) 苦手と同じ要素を発揮した」24.6%、「得意と異なる要素を発揮した」38.6%、「得意と異なる要素を発達させたい」61.4%であり、得意要素から新たな要素へと意識と行動が展開していることが確認できる。

4) 上記の変化が内発的なものであるかどうかを確かめる意味で、「苦手要素に対する意識の変化」を問うたところ、変化を示す記述が91.2%（3要素別には有能性95.7%＞自律性89.5%＞関係性86.7%）であった。さらに、その変化内容を自由記述（表6に例示^(注6)）から分類整理すると、全体では、「意識的变化」70.2%＞「行動的变化」21.0%＞「その他」8.8%であるが、図5に示すように、「行動的变化」は有能性や自律性を苦手としていたものに目立っている。

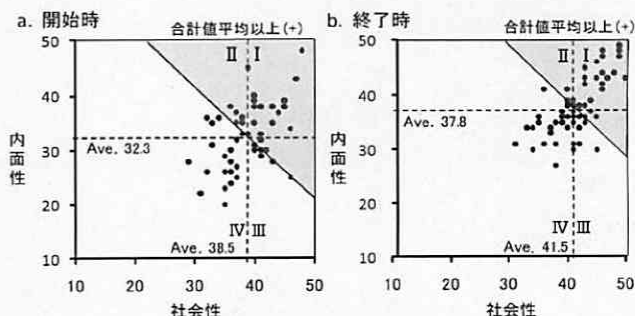


図1 WS開始時と終了時の心理特性変化分布

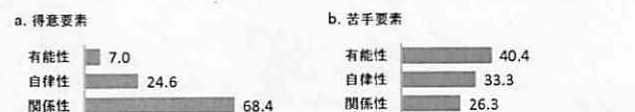


図2 WS中の欲求要素の構成

表5 心理特性別に見た欲求要素

心理特性	人	得意要素(100%)			苦手要素(100%)		
		有能性	自律性	関係性	有能性	自律性	関係性
Ⅰ	+	5.6	11.1	83.3	33.3	44.4	22.2
Ⅱ	+	9.1	54.5	36.4	18.2	45.5	36.4
Ⅲ	-	12.5	12.5	75.0	50.0	37.5	12.5
Ⅳ	-	5.0	35.0	60.0	55.0	35.0	10.0
全体	57	7.0	28.1	64.9	40.4	40.4	19.3

+ 平均以上
- 平均以下

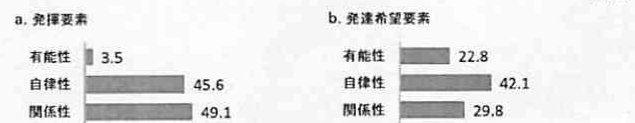


図3 発揮要素と発達希望要素

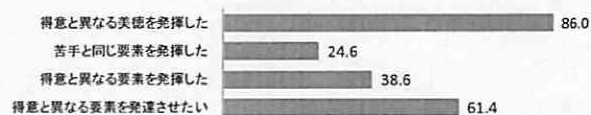


図4 発揮要素と発達希望要素の性格

表6 WS中の苦手要素の変化内容と分類評価（例）

苦手分野	項目	記述内容	記述の評価分類
有能性	自信	自分の中で、すでにチャレンジしたり、試行錯誤していたことがあった。	①
	自信	話すことを全部しつめやめて下り、自信を持つことができた。	②
	自信	相手に言われて、自分では気づかぬ美德に気づいて、少し自信がもてた。	②
	整理整頓	周りを整理すれば安心で生活しやすくなり、仕事も生活も楽々と思えた。	①
自律性	忍耐	嫌な嫌なと思いつつも、黙って我慢している自分からなれた。	①
	勇気	意見を言えてスッキリした。失敗も気にせず、前向きな気持ちになった。	②
	自己主張	話をしない人とのことはわからないので、主張をしてみたいと思った。	①
	目的意識	目的がはっきりとやる気が起きない。小さいことから目的を立てようと思った。	①
関係性	寛容	相手から言われて、そういうところもあったと思うようになった。	①
	柔軟性	いろいろな方の話を聞き、もっと柔軟に考えて生きていきたいと感じた。	①
	手伝い	自分も周りも大切にするため手伝いの美德をもっと発達させようと思った。	①
	気転	特に変化なし	③

※①意識的变化 ②行動的变化 ③その他、無回答

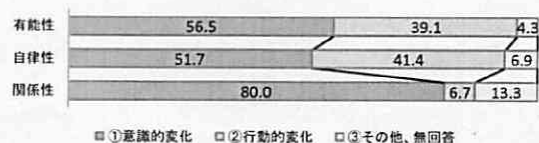


図5 苦手要素の変化内訳

5) 1ヶ月後に改めて把握した欲求要素（得意要素と苦手要素）を示したものが図6である^(注7)。全体的には図2と大きな違いがみられないが、その中には「対象者個人ごとの変化」が隠れている。その変化を調べると、得意項目が変化したものが13名で22.8%、そのうち同一要素内での変化（例：礼儀→共感）が9名、異なる要素への変化（例：寛大→決意）が4名、苦手項目が変化したものが9名で15.8%、同一要素が2名（例：謙虚→寛容）、異要素が7名（例：忠誠心→目的意識）となっており、変化を読み取ることができる。

6) 上記1ヶ月後の欲求要素に対する自己評価結果（得意要素・苦手要素それぞれの成長度について4段階評価）、および、その内容を自由記述から分類整理（表7に例示^(注8)）したものが図7である。得意要素については約80%、苦手要素についても約40%以上が1ヶ月後の「成長（行動的変化をとともう成長）」を自覚している様子が確認できる。さらに、この4段階評価を前項で述べた「変化の有無」別に示したものが図8^(注9)であり、得意・苦手のいずれも、「変化あり（WS時と異なる要素を見出した）」の方が評価が高い（「まあまあ成長」以上の割合が高い）点が注目される。

7) 以上にみてきた心理特性と欲求要素の変化を、[開始時心理特性（平均以上or以下）]→[終了時心理特性（平均以上or以下）]→[1ヶ月後欲求要素自己評価（平均以上or以下）]の流れで分類整理したものが図9である（A～Hの8タイプに類型化）^(注10)。主要なタイプはF：13人＞B：11人＞G：9人＞C：8人＞H：7人の順である。

3. 変化類型別にみた変化の特徴

1) 図9の類型をもとに、終了時と1ヶ月後の変化に着目し、対照的な結果となったABとGHを比較したものが表8、図10、11である（ABは終了時・1ヶ月後ともに平均以下、GHはともに平均以上）。どちらも有能性、ついで自律性を苦手としているが（※ただし、GHに自律性がやや多い）、心理特性は、ABがⅠ～Ⅲに分散しているのに対し、GHはⅣ（内面性、社会性ともに平均以下）が最も多い。

2) 開始時にGHは、心理特性の内面性、社会性ともにABより下位にあったが、終了時に逆転し、特に内面性の変化が大きい（図10）。1ヶ月後の変化は、4段階評価、記述による評価ともにGHの優位性が高く、特に、苦手な要素に差が表れている（図11）。

3) 以上より、有能性、自律性が低く、Ⅳグループが最も多いGHが大きな変化を遂げた様子を読み取ることができ、GHの成長に影響を与えた方法論を「苦手な要素の違い」に着目して分析することの意義を導き出した。

4) 次に、開始時の心理特性がどちらも平均以下であり、1ヶ月後に対照的な結果となったACとEGを比較したものが表9、図12、13である（ACは平均以下、EGは平均以上）。どちらも開始時の心理評価が平均以下でⅣグループの割合が高いが、ACの苦手な要素が有能性に偏っているのに対し、EGは有能性とともにより自律性が多いことが特徴である。

5) AC、EGは開始時と終了後の心理特性に大差はないが（図12）、1ヶ月後に対照的な結果となり、特に、苦手な要素に顕著な差異が表れている（図13）。

6) 以上より、開始時ともに心理特性が平均以下であったグループを1ヶ月後に対照的な結果に導いた方法論を「苦手な要素の違い」に着目して分析することの意義を導き出した。



図6 1ヶ月後の欲求要素の構成

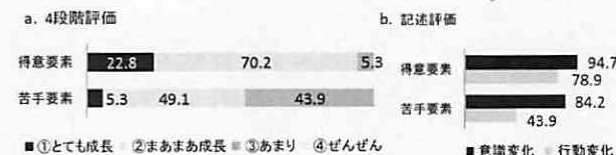


図7 1ヶ月後の欲求要素の自己評価

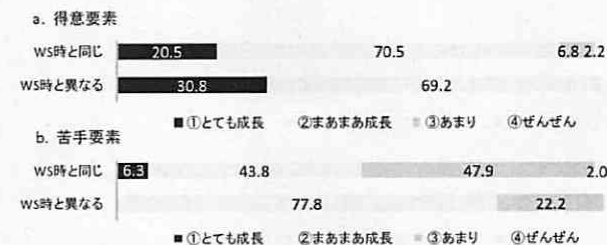


図8 1ヶ月後の欲求要素の変化内訳

表7 1ヶ月後の欲求要素の変化内容と分類評価（例）

a. 得意要素		記述内容		評価	
要素	項目	記述内容		意識	行動
有能性	信頼性	信頼してもらえるような仕事をしようと思っ	人間性も信頼される	○	○
	整理整頓	身近なところから、物の置き場所や在庫整理などを心がけている。仕事はため		○	○
自律性	決意	目的意識をさらに強く持つことができ、内からの力がみなぎっている。		○	-
	忍耐	壁にぶつかっても、何とか乗り越えようと思っ	副主任としてもっとこの美徳を	○	○
関係性	理解	利用者の方に対する関心姿勢や接し方について	美徳を	○	-
	誠実	誠実であることを常に意識し、患者様に接するよう		○	○
	優しさ	利用者の中には、怒ったり、同じことを何回も言われる方が		○	○
	謙虚	特に意識したりはしていない。普段から控え目な		-	-

b. 苦手要素		記述内容		評価	
要素	項目	記述内容		意識	行動
有能性	自信	失敗しても今度はがんばろうと前向きな気持ちで		○	-
	自信	自信をもって仕事ができるよう心掛けることで、自分の見方、周りの反応や態度		○	○
	創造性	性格的なこともありすぐには変わらないが、正直に他の職員に意見を求めたり、		○	-
自律性	目的意識	毎日目的を持って働くようになり、寝る前や風呂で、どんな一日だったか		○	○
	目的意識	目の前の仕事で精一杯で、大きな目的意識を持って進めるのは難しい。		-	-
	自己主張	自分から声を出すことは職員どうしの連携に関わってくるので、そのことを		○	○
関係性	寛容	余裕のない時に、一呼吸おいて気持ちを静め、ゆっくり話を聞いている。		○	○
	礼儀	誰に接するときも礼儀正しく、尊敬の気持ちで接するようになった。		○	○

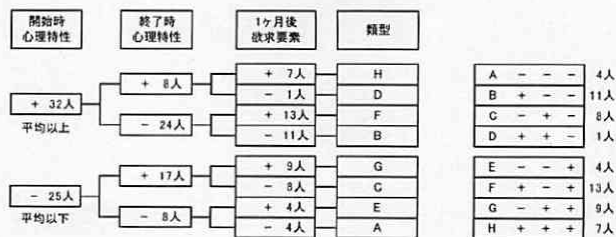


図9 心理特性と欲求要素の変化パターン8類型

表8 AB・GHグループ別にみた対象者特性(上段:人、下段:%)

	心理特性				苦手な要素			全体
	I	II	III	IV	有能性	自律性	関係性	
AB	4	5	5	1	8	4	3	15
±---±	26.7	33.3	33.3	6.7	53.3	26.7	20.0	100.0
GH	5	2	2	7	8	6	2	16
±+++±	31.3	12.5	12.5	43.8	50.0	37.5	12.5	100.0

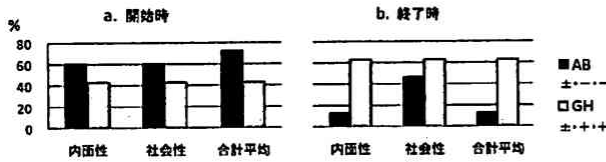


図10 AB・GHグループ別にみた心理特性の変化

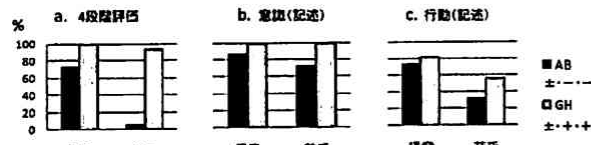


図11 AB・GHグループ別にみた1ヶ月後の欲求要素の変化

表9 AC・EGグループ別にみた対象者特性(上段:人、下段:%)

	心理特性				苦手な要素			全体
	I	II	III	IV	有能性	自律性	関係性	
AC	0	2	1	9	8	2	2	12
±---±	0.0	16.7	8.3	75.0	66.7	16.7	16.7	100.0
EG	0	1	1	11	6	6	1	13
±+++±	0.0	7.7	7.7	84.6	46.2	46.2	7.7	100.0

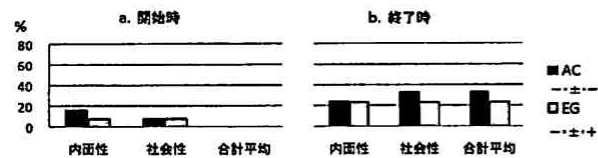


図12 AC・EGグループ別にみた心理特性の変化

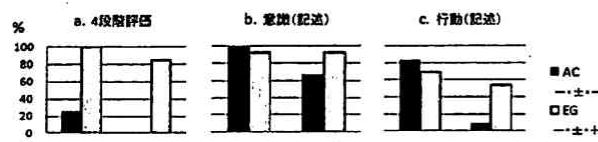


図13 AC・EGグループ別にみた1ヶ月後の欲求要素の変化

4. 変化類型別にみたプログラムとの関係

(1) 学びの形態、営みの分析

1) プログラムとの関係性を分析するために、ふりかえりシートと研修報告書の記述(全員記名)から、「3つの学びの形態」「6つの学びの営み」についてWS時のやりとりの記憶とともに集計分類し、ABとGH、ACとEGの傾向を比較したものが図14~17である。

2) 図14からGHとEGの共通点をみると、学びの形態は、自分、周り、講師との対話すべてにおいて、学びの営みは、内省、分ち合い(図中表記は「分合」)、承認に優位性が表れている。一方、EGでは物語にも特徴がみられ、苦手な要素として自律性の割合がACに比し

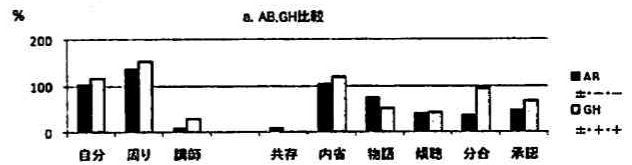


図14 類型別にみた学びの形態、営み

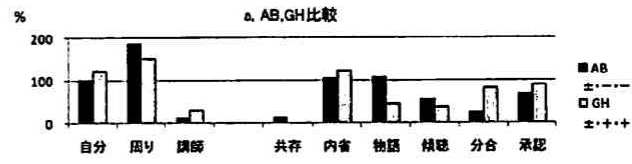


図15 [苦手=有能性]グループの学びの形態、営み

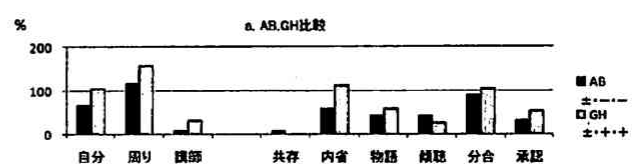


図16 [苦手=自律性]グループの学びの形態、営み

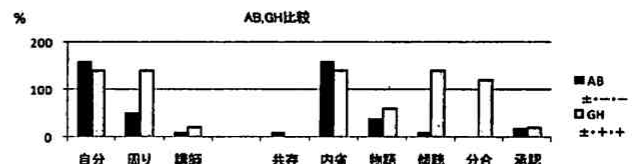


図17 [苦手=関係性]グループの学びの形態、営み

て高かったことから、自分の体験から得た気持ちや考え等を語る行為を通して自己主張、自己表現の力を育んだことが推察される。

3) 図15~17^(注11)は、3つの苦手な要素別に比較を行ったものである。GHとEGの共通点をみると、有能性は自分、講師との対話、内省、分ち合い、承認に、自律性は自分、周りとの対話、内省、物語、分ち合い、承認に、関係性は周り、講師との対話、物語、傾聴、分ち合いに特徴がみられる。分ち合い、承認は、全体を通して優位性が表れており、特に重要な行為と考えられる。内省は3つに共通しており、特に有能性、自律性に優位性が表れている。

表 10 有能性を苦手とするグループの学びの階段と形態・営みの関係（回答者数に対する意見割合％）

●EFGH9人（ABCDに対して優位性のある項目を着色）

(人)	学びの形態			学びの営み						
	自分	周り	講師	共存	内省	物語	傾聴	分合	承認	
会場設置	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
参加のルール	3	0.0	66.7	33.3	0.0	0.0	100.0	66.7	33.3	0.0
アイスブレイク	3	33.3	66.7	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	66.7	0.0
カードピック	5	80.0	20.0	20.0	0.0	80.0	0.0	0.0	40.0	0.0
ペアづくり	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ワーク1	9	222.2	222.2	33.3	0.0	222.2	55.6	44.4	88.9	166.7
ワーク2	8	125.0	187.5	37.5	0.0	125.0	50.0	50.0	100.0	112.5
ワーク3	1	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
合計人数対比(%)		120.7	141.4	27.6	0.0	120.7	41.4	34.5	75.9	82.8
形態・営み内訳(%)		41.7	48.8	9.5	0.0	34.0	11.7	9.7	21.4	23.3

表 11 自律性を苦手とするグループの学びの階段と形態・営みの関係（回答者数に対する意見割合％）

●EFGH14人（ABCDに対して優位性のある項目を着色）

(人)	学びの形態			学びの営み						
	自分	周り	講師	共存	内省	物語	傾聴	分合	承認	
会場設置	1	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
参加のルール	4	25.0	25.0	75.0	0.0	25.0	25.0	100.0	100.0	25.0
アイスブレイク	4	50.0	75.0	0.0	0.0	50.0	25.0	0.0	50.0	0.0
カードピック	7	128.6	14.3	42.9	0.0	128.6	0.0	0.0	57.1	0.0
ペアづくり	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ワーク1	14	185.7	200.0	14.3	0.0	192.9	92.9	50.0	92.9	78.6
ワーク2	12	50.0	158.3	0.0	0.0	50.0	83.3	33.3	83.3	25.0
ワーク3	2	50.0	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0
合計人数対比(%)		102.3	122.7	19.2	2.3	104.5	56.8	34.1	77.3	34.1
形態・営み内訳(%)		42.1	50.5	7.5	0.7	33.8	18.4	11.0	25.0	11.0

表 12 関係性を苦手とするグループの学びの階段と形態・営みの関係（回答者数に対する意見割合％）

●EFGH10人（ABCDに対して優位性のある項目を着色）

(人)	学びの形態			学びの営み						
	自分	周り	講師	共存	内省	物語	傾聴	分合	承認	
会場設置	1	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
参加のルール	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
アイスブレイク	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
カードピック	3	166.7	133.3	0.0	0.0	166.7	0.0	0.0	100.0	0.0
ペアづくり	1	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ワーク1	10	150.0	140.0	30.0	0.0	140.0	60.0	60.0	70.0	70.0
ワーク2	6	33.3	150.0	0.0	0.0	16.7	50.0	66.7	50.0	66.7
ワーク3	2	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計人数対比(%)		104.3	126.1	13.0	8.7	95.7	39.1	43.5	52.2	47.8
形態・営み内訳(%)		42.9	51.8	5.4	3.0	33.3	13.6	15.2	18.2	16.7

(2) 学びの階段、形態、営みの分析

1) (1)と同様の記述材料をもとに、「学びの形態」「学びの営み」を「学びの階段」との関係で集計し、1ヶ月後の変化が平均以上(EFGH)、平均以下(ABCD)について、苦手な要素別に表したものが表 10, 11, 12 である。また、分析のもととなった記述例を表 13 に示した。

①有能性が苦手なグループの特徴

・講師との対話、承認に特徴があり、ワーク 1, 2 の分ち合い、承認に特に優位性が表れている。他者と意見を交わし、承認されることで美德を発見し、有能性を高めたと考えられる。

・ワーク 2 では、自分、周り、講師の 3 つの対話のいずれにも優位性がある。失敗や困難を乗り越えることについて講師、および自分との対話や周りの体験談から自信を育んだと考えられる。

・参加のルールでは、講師との対話と物語が注目できる。「自分自身を尊敬して話す」「正直にありのままを話す」というルールにより、自信をもって、自分の体験や考えを話すことができたことと推察される。

②自律性が苦手なグループの特徴

・物語と分ち合いに特徴があり、自分の想いや考えを伝える力を育んだことが窺える。参加のルールでは、講師との対話に優位性がみられ、「正直に真実を語る」「相手を尊重し、自制心を持って話を聞く」などのルール説明により、話す勇気が育まれたと考えられる。

・ワーク 2 では、内省、物語、傾聴、分ち合いに優位性が表れている。参加のルールで学んだ対話の姿勢をもとに、正直に語り、相手

●ABCD14人

(人)	学びの形態			学びの営み						
	自分	周り	講師	共存	内省	物語	傾聴	分合	承認	
会場設置	1	0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
参加のルール	4	50.0	125.0	25.0	50.0	50.0	100.0	25.0	50.0	50.0
アイスブレイク	4	75.0	50.0	0.0	0.0	75.0	25.0	0.0	50.0	0.0
カードピック	1	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ペアづくり	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ワーク1	14	200.0	242.9	21.4	0.0	214.3	100.0	42.9	107.1	107.1
ワーク2	11	18.2	154.5	0.0	0.0	18.2	90.9	54.5	0.0	54.5
ワーク3	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計人数対比(%)		102.9	165.7	14.3	8.6	108.6	77.1	45.7	25.7	65.7
形態・営み内訳(%)		36.4	58.6	5.1	2.5	31.4	22.3	13.2	7.4	19.0

●ABCD5人

(人)	学びの形態			学びの営み						
	自分	周り	講師	共存	内省	物語	傾聴	分合	承認	
会場設置	1	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
参加のルール	2	0.0	50.0	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0
アイスブレイク	1	100.0	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0
カードピック	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ペアづくり	1	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ワーク1	5	140.0	220.0	0.0	0.0	140.0	100.0	100.0	120.0	80.0
ワーク2	3	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	33.3	33.3	66.7	33.3
ワーク3	2	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
合計人数対比(%)		60.0	126.7	6.7	20.0	53.3	40.0	40.0	80.0	33.3
形態・営み内訳(%)		31.0	65.5	3.4	7.5	20.0	15.0	15.0	30.0	12.5

●ABCD5人

(人)	学びの形態			学びの営み						
	自分	周り	講師	共存	内省	物語	傾聴	分合	承認	
会場設置	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
参加のルール	2	150.0	0.0	50.0	50.0	150.0	0.0	0.0	0.0	0.0
アイスブレイク	1	100.0	100.0	0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0
カードピック	4	75.0	0.0	50.0	0.0	75.0	25.0	0.0	25.0	25.0
ペアづくり	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ワーク1	5	200.0	120.0	20.0	0.0	200.0	60.0	20.0	60.0	60.0
ワーク2	4	100.0	150.0	0.0	0.0	100.0	100.0	50.0	50.0	75.0
ワーク3	2	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計人数対比(%)		127.8	72.2	22.2	5.6	127.8	50.0	16.7	33.3	38.9
形態・営み内訳(%)		57.5	32.5	10.0	2.0	46.9	18.4	6.1	12.2	14.3

を尊重して聞き、意見を分ち合う力を育んだと考えられる。

③関係性が苦手なグループの特徴

・周りとの対話、共存、傾聴に特徴がある。ワーク 1, 2 の傾聴に特に優位性がみられ、相手を尊重して話を聞く営みから、共感、理解、思いやりなど関係性に関わる美德を育んだ様子が窺える。

・会場設置、ペアづくりでは、共存関係が構築され、周りとの対話に有効に働いたことが窺える。

・カードピックでは、自分や他者が引いたカードにより、内省、分ち合いを通して、人と人との関わり方について学んだことが窺える。

2) EFGH と ABCD の学びの営みについて 3 つの苦手な欲求要素別に比較したものが図 18 である。共通して優位性が表れているのは、分ち合いの自律性、承認の有能性である。そして、EFGH では、物語に自律性、傾聴に関係性の特徴が表れていることにも着目できる。

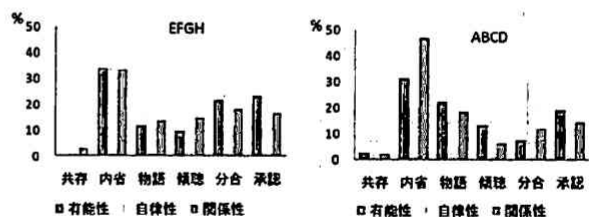


図 18 苦手な欲求要素別学び営み

表 13 苦手要素別にみたプログラムに関する記述意見 (例) 注 12)

●有能性が苦手なEFGHの意見(例)

段階	形態	営み	意見内容
カード ピック	自分 講師	内省 分合	これまで、自信は完璧というイメージだったが、そうではないと聞いてびっくりした。自分を信じ、間違いも間違いで終わりでないという考えで生きていこうと思った。
ワーク1 ワーク2	自分 講師	内省 分合	失敗しても、学びのチャンスとポジティブに捉えること、人の行動や態度にあらわすのではなく、互いに良い面を見つめ、認めて引き出し合うことが自分を高め、良い人間関係をつくる上で大変だと思った。
	自分 講師	内省 承認	自分では気づけなかったことも周りから嬉しい言葉をもらい、場所を感じていても違う角度から見たら長所になり、52の美德は常に隣り合わせで、様々な美德が溢れて今の生活や自分があるんだと感じた。
	周り 講師	内省 承認	生きている中で、直接的な関係を築くことはあまりないのかもしれない。自分の欠点や失敗を気にして、それでも何とか立ち上がろうとがんばっている。しかし、52の美德の学びは、心を豊かにして自分も相手も好きになれると感じた。相手から、自分が気づいていない良いところを見つけてもらって、不思議と元気が湧いて、自信が持てるようになった。

●自律性が苦手なEFGHの意見(例)

段階	形態	営み	意見内容
参加の ルール	周り 講師	傾聴 分合	相手の話を聞くこと、新しい考え方を受け入れてみることも、お互いに安心して距離を保つということの大切さに気づいた。
カード ピック	周り 講師	傾聴 分合	思いを言葉にして伝えることの大切さと楽しさを学んだ。初対面で積極的な年齢も違う方と打ち合わせることができた。楽しい時間だった。これからは52の美德をふりかえり実践していきたい。
ワーク1	自分 講師	内省 承認	不得意な美德は忍耐を選んだ。大変なことや辛い時に逃げようとしてしまうから、しかし、ズバンの人に会うと、それを直そうと向き合っていると気づいた。前向きに取り組んでいこうと思った。
ワーク1 ワーク2	自分 講師	内省 承認	自己主張の美德を聞き、自分の考えを持ち、勇気を持って話ができるようになったと思った。
ワーク2	周り 講師	傾聴 分合	正面面でも、互いにいいことがお互いに、正直に言えた。

●関係性が苦手なEFGHの意見(例)

段階	形態	営み	意見内容
会場設置	周り 講師	傾聴 分合	輪になって、参加している方々の表情を見て、直接意見を聞いた。
ペア づくり	周り 講師	傾聴 分合	ペアづくりは、なんと半分は割れたビスケットが使われ、片割れを探して作業をとても楽しめた。
ワーク1	周り 講師	傾聴 承認	お互いの良いところを出し出すワークで責任感、柔軟性、思いやりなどの言葉が溢れた。そうならないと常に思っていたのでうれしかった。自分も周りも大事にすると自覚した先生の言葉を忘れずにいたい。
ワーク1 ワーク2	周り 講師	傾聴 承認	相手の話をきちんと聴くことが大切だと改めて感じた。共感することがあり、もっといろいろな方の思いや苦衷、感じていることを聞き、共感することがあり、もっといろいろな考え方で柔軟に努めていきたいと感じた。

5. まとめ

- ① 自らの得意・苦手の探求を通して3つの心理的欲求が変化することで内発的動機づけが芽生え、組織市民力の向上、意識・行動の変化が生まれたと推察される。得意・苦手の成長だけでなく、新たな成長課題を認識でき、成長意欲が生まれたことも重要と考える。
- ② 3つの欲求要素別に行ったABとGH、ACとEG、ABCDとEFGHの分析から、学びの要素(形態、営み、階段)にはそれぞれ特徴、意味があり、相互に有機的な学びの環境を創り出すことで、3つの欲求要素それぞれに影響を与えることが明らかとなった。これらの方法論は、今後、欲求要素を意識した学びの支援に役立つと考えられる。
- ③ 主として、「承認」は有能性、「物語」「分ち合い」は自律性、「共存」「傾聴」は関係性を育むことがわかった。これらの営みが、内発的動機づけを高めていく上で特に重要と考えられる。
- ④ 苦手な要素の行動変化に課題が残されており、日常業務の研鑽を通して一人一人が持続的に取り組んでいくだけでなく、定期的に課題を持ち寄り、追加研修を行うことが有意義と考えられる。
- ⑤ 本研究では、福祉施設職員についての検証を行った。一般市民や子どもたちの学びの場、実際のまちづくり等での応用によりシティズンシップの意識・行動の変化を検証することが今後の展望である。

最後に、研究の実施にあたり、多大な御協力をいただいた藤井康広氏(医師)、浦山晶美氏(助産師)、大内博氏(元玉川大学教授)、鈴木み子氏(心理カウンセラー)に心から謝意を表します。

注

- 注 1) シティズンシップとは、多様な社会の中で自己を守り自己表現を図るとともに、よりよい社会の実現のために意志決定や運営に積極的に関わろうとする資質であり、知識、スキル、意識の3つの能力が必要であるとされている。参考文献 1)
- 注 2) 本プログラム設計の参考とした美德教育プログラムは、リンダ・カヴェリン・ボボフ(心理療法士)、ダン・ボボフ(臨床小児心理学者)等により1988年にカナダで誕生し、家庭・学校・職場・医療福祉など様々な領域において「人格の文化」の形成をめざす教育プログラムである。国際家族年(1994年)に、グローバルな教育モデルとして国連にて表彰された。
- 注 3) 特別養護老人ホーム、老人保健施設、医院等に所属する10~50代の介護、看護、栄養、事務等の職員に対し、組織市民としての行動力(組織内で給与等の外発的要因に関わらず自発的に行動する力)向上を目的に実施。
- 注 4) 『心理測定尺度集』参考文献 12)、13)から設問を抜粋し、内面性、社会性それぞれ10項目からなる独自のアンケート票を設計した。
- 注 5) 「自己決定理論(self-determination theory)」Deci&Ryan、参考文献 6)、7)、『52の美德教育プログラム』、参考文献 14)をもとに筆者が作成。
- 注 6) 表中の下線の表現を中心に、変化に行動を伴うものを行動的変化、意識にとどまるものを意識的変化として分類し、右欄に該当番号を入れた。
- 注 7) 1ヶ月後に欲求要素(得意・苦手)がどう変化したかをそれぞれの美德の言葉と変化内容について記入したものを集計した。
- 注 8) 表中の下線の表現を中心に、1ヶ月後の変化に行動を伴うもの、意識にとどまるものを分類し、該当するものについて右欄に○をつけた。
- 注 9) WS時と同じ要素を表した者、異なる要素を表した者それぞれについての4段階評価を集計し、グラフ化した。
- 注 10) それぞれの時点で分析した心理特性、欲求要素の結果を平均以上、以下に分けて、「+」「-」で表現し、A~Hの8グループに類型化した。
- 注 11) 関係性を苦手とするEGが1名のため、図17はAB、GHのみ分析した。
- 注 12) 表中の表現やWS時のやりとりをもとに分類した。「内省」は、学びの事実や感想だけでなく、自らの思考や意志に通じる表現に配慮した。

参考文献

- 1) 経済産業省：シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書、pp. 20, 23-27, 2006. 3
- 2) 堀井明子：世界のシティズンシップ教育、pp. 4-8, 東信堂, 2008. 5
- 3) 長沼豊：市民教育とは何か、ひつじ市民新書、pp. 24-27, 2003. 3
- 4) 小玉重夫：シティズンシップ教育思想、pp. 166-169, 白澤社, 2006. 1
- 5) 木下勇：ワークショップ 住民主体のまちづくりへの方法論、学芸出版社, 2009. 6
- 6) 上淵寿：動機づけ研究の最前線、北大路書房、pp. 23, 24, 48, 49, 2007. 5
- 7) エドワード・L・デシ、リチャード・フラスト、桜井茂男(監訳)：人を伸ばす力-内発と自律のすすめ、新曜社、pp. 27, 28, 2005. 8
- 8) 中野民夫、堀 公俊：対話する力 ファシリテーター23の問い、日本経済新聞出版社、pp. 16-41, 2009. 5
- 9) ケネス・J・ガーゲン、東村知子(訳)：あなたへの社会構成主義、ナカニシヤ出版、pp. 231-240, 2004. 11
- 10) 菊池裕生、大谷栄一：社会学におけるナラティブ・アプローチの可能性、社会調査の知識社会学、年報社会科学基礎論研究 第2号(2003年度)、pp. 167-183, 2003. 6
- 11) 西田豊昭：企業における組織市民行動に関する研究、経営行動科学第11巻第2号、pp. 101-122, 1997
- 12) 堀 洋道(監修)、山本真理子(編)：心理測定尺度集(1) 人間の内面を探る「自己・個人内過程」、サイエンス社、2001. 7
- 13) 堀 洋道(監修)、吉田富士雄(編)：心理測定尺度集(2) 人間と社会のつながりをとらえる「対人関係・価値観」、サイエンス社、2001. 7
- 14) リンダ・カヴェリン・ボボフ、大内博(訳)：52の美德教育プログラム、太陽出版、pp. 217-426, 2005. 1
- 15) 浦山晶美：心理的アプローチとして「美德教育プログラムの方法」(Virtues Approach)を取り入れた「マタニティークラス」の構成とその効果について、母性衛生 第50巻4号、pp. 620-628, 2010. 1

[2011年6月20日原稿受理 2011年8月26日採用決定]